

# 高校普通教科『情報』 授業実施状況予備調査報告

A Report on Preliminary Survey on High School Subject "Joho"

皆川 雅章, 佐藤 友暁, 新國三千代, 石川 千温, 中村 永友

2006年度からは大部分の新生が新しい教科「情報」を高等学校で学んでいることを前提に大学の授業が行なわれることになる。教科「情報」と本学の「情報」関連科目との接続を行なっていくために、2004年度から本学教員が高等学校の授業を見学し、実施状況の調査を行なってきた。これまでの調査結果を報告する。

## 1. はじめに

高等学校で教科「情報」がスタートして3年目となる。2006年4月からは、大部分の新生がこの教科を学んできていることを前提に大学の講義が行なわれることになる。札幌学院大学社会情報学部では2003年7月に「第13回社会と情報に関するシンポジウム」において、「高校の教科「情報」の理念と現実：大学教育は何をなすのか」をテーマとして、教科「情報」に深く関わっている2名の大学教員、1名の高校教員を講師として招き、講演を通じた情報収集とディスカッションを行なった。講演題目と講師は次の通りである。

講演題目	講師
高校普通教科『情報』と大学『情報教育』との接続性をどう考えるか	岡本敏雄 教授 (電気通信大学)
新教科『情報』の理想と現実	生田茂 教授 (東京都立大学)
学びのインフラとしての『情報』	奥村稔 教諭 (札幌北高校)

はじめに、これらの講演の概要について記しておく。岡本氏は、高等学校に普通教科「情報」を必修科目として導入した経緯、大学の教養科目との接続の指針などを示し、この中で、高等学校普通科の生徒達に「情報」を学習する機会を保障するために独立教科を必修として立ち上げたことを述べた。次に、「情報活用能力の実践」、「情報に関する科学的な見方・考え方」、「情報社会に参画する態度の育成」の3つの目標に従って、「情報」をA・B・Cに分けたこと、「情報」をセンター試験に入れることの必要性を説明した。そして、この新しい教科が独立した教科として定着してきた段階で大学の教養教育としての情報教育をどのようにすべきかの考えを述べた。質問に答える形で、教科「情報」が伝統的な学校文化、学校社会、価値観とは異なる新しい学力を高校生達に身につけさせるべきものであること、十分にリテラシーを身につけてこなかった学生には大学として教育を保障すべきであることを指摘した。(岡本(2004))

生田氏は、都立大学附属高校の校長を兼任した経験もふまえ、東京都における高等学校

MINAGAWA Masaaki 札幌学院大学社会情報学部  
SATO Tomoaki 弘前大学総合情報処理センター  
NIKKUNI Michiyo 札幌学院大学社会情報学部  
ISHIKAWA Chiharu 札幌学院大学商学部  
NAKAMURA Nagatomo 札幌学院大学経済学部

の教科「情報」の位置づけ、教員採用の問題について指摘した。まず、東京都の進学重視の方針と、教科「情報」の配当学年との関係について現状を説明し、チームティーチングが可能な教員数の確保と環境整備の必要性について述べた。次に、この新しい教科「情報」づくりを個々の教員任せにするのではなく、学校全体の問題として「学校づくり」を考えて努力する姿勢の必要性、そこに大学教員が果たせる役割が存在する可能性を述べた。(生田 (2004))

奥村氏は北海道における教員養成の経緯、教科書の内容、授業実践例、評価方法について述べた。まず、教科「情報」の免許取得方法は3通りあり、現在の教員の大半が現職教員等講習会で養成されたことを説明し、情報A・B・Cの教科書と指導書を、使用する立場から紹介・評価し、授業の実践例を氏の場合も含めて説明するなかで、生徒達の反応を紹介し、実施上のポイントや問題点の指摘を行なっている。次に、学習状況の評価を指導と一体化させて行なう際の、プロセスの評価とペーパーテストによる評価の兼ね合いの問題を説明した。そして最後に、リテラシーやスキル獲得レベルでの「見える平均化」と、生徒個々人の想像力や批判力に基づく「見えない格差」の問題が存在することを示唆した。

この場で奥村氏から、「高校と大学の対話の場」を設けることの希望が出され、その後の依頼により、2004年1月に開催された北海道高等学校教育研究会第2回情報部会研究会に石川がミニ・シンポジウムのコメンテータとして参加した。このときのテーマは「情報教育の高大連携」である。最初に、高校教員側から教科「情報」の履修状況、この科目を教える上での問題点、大学入試との関連、次期カリキュラムの展望、高大連携の可能性などについて提言があり、これに基づいて意見交換が行なわれている。(石川 (2004))

2006年度には、従来の職業高校で情報処理

教育を受けた層に加え、さらに教科「情報」において異なったレベルの知識と経験を持つ入学受入れることになる。上述のシンポジウム等における議論をふまえ、本学において、このような多様な学生達を教育する準備を速やかに行なう必要がある。この理由から、現段階で道内高校における、教科「情報」の授業の実施状況について、出来る限り「実情」を把握することは大きな意義があると考え、全学的な取組みとして予算措置を行ない、調査を開始した。アンケートのみによる形式的な調査ではなく、高等学校に直接向いて「現実に行なわれていること」を、授業見学等を通じて、大学の情報教育に携わる教員の目で調査することを目標とした。2004年は、その「予備段階的な調査」として位置付け、2005年は高校と大学での「接続」を意識した活動を行なっている。

## 2. 本学の状況

はじめに、札幌学院大学の基礎的な情報教育に関わる状況について概観しておく。入学定員は次の通りである。社会情報学部では、学部の専門科目である情報処理基礎、情報処理基礎演習、その他の学部では、全学共通科目「コンピュータ基礎」において情報処理の基礎を学ばせている。

学 部	学 科	入学定員
人文学部	人間科学科	130
	英語英米文学科	70
	臨床心理学科	90
法学部	法律学科	200
経済学部	経済学科	200
商学部第一部	商学科	200
社会情報学部	社会情報学科	200
		1090

2005年度北海道内高校出身入学者(1007名)の支庁別割合は次の通りである。(調査対象を北海道内に限定した。北海道外出身者合

計は 137 名である。)札幌市を含む石狩支庁が全体の半数以上を占めるが、入学者の出身地は北海道のすべての地域に散らばっている。

支庁名	割合 (%)
石狩	54.1
空知	6.2
後志	5.0
檜山	0.4
渡島	4.1
胆振	6.7
日高	1.1
十勝	6.4
釧路	2.6
根室	0.5
網走	5.0
上川	7.0
宗谷	0.8
留萌	0.4

### 3. これまでの取組み (クラス分け)

社会情報学部を除く学科では全学共通科目として「コンピュータ基礎」が実施され、今年度は表1のような調査(プレースメントテスト)を行なっている。いずれも選択式の問題である。

このテストは試験的な意味合いはなく、その時点でコンピュータに慣れているかどうかを問うている。この結果から経験の度合いを区別し、クラス分けを行なっている。このクラス分けの結果、授業開始当初に学生達の理解度・進度に差があったが、後半では顕著な差はなかった。講義内容を表2に示す。テキストは石川他(2004)を使用している。

社会情報学部の2005年度入学生140名に対して実施した、教科「情報」、コンピュータリテラシーに関するアンケート内容とその結果は次の通りである。

I. 高校の教科「情報」について	
使用したテキスト	(1) 情報A 8名 (2) 情報B 0名 (3) 情報C 1名 (3) わからない 46名 (4) やっていない 85名
授業を受けた学年	(1) 2年生 11名 (2) 3年生 15名 (3) わからない 14名 (4) やっていない 82名
II. 高校までのパソコン歴	
Word や一太郎などのワープロを使用した	(1) はい 92名 (2) いいえ 48名
Excel などの表計算ソフトを使用した	(1) はい 61名 (2) いいえ 79名
インターネットでホームページ(Webページ)を閲覧した	(1) はい 128名 (2) いいえ 12名
インターネットのメールを使用した	(1) はい 72名 (2) いいえ 68名
インターネットでチャットを使用した	(1) はい 55名 (2) いいえ 85名

この結果では教科「情報」を「やっていない」と回答した学生が半数以上である。森(2005)におけるアンケート調査(札幌学院大学の近隣に位置する酪農学園大学の学生を対象としている)でも同様の結果が報告されている。次年度の入学生を対象とした場合には、この人数は大きく変化することが予想される。ワープロの使用やインターネットでホームページ閲覧は何らかの形で行なわれていることが読み取れるので、教科「情報」以外の科目として実施されている可能性もある。(2003年度の全国の高校を対象とした実施初年度アンケート調査は布施ほか(2005)を参照。北海道は約24%の高校が回答。)

社会情報学部では、このアンケート結果に基づき、履修者を大きく2クラスに分けて授業を実施している。講義内容を以下に示す。

項目	授業内容
1	ノートパソコン初期設定
2	Windowsの基本操作、タイピング

3	情報倫理
4	Wordによる文章作成
5	電子メール
6	Wordによるレポート作成
7	インターネットによる情報収集
8	PowerPointによるプレゼンテーション
9	Excelによる表計算とグラフ作成

社会情報学部ではノート PC を入学時に学生に購入させ、大教室で TA (Teaching Assistant) や SA (Student Assistant) を配置して授業を実施している。TA は北海道大学の大学院生、SA は本学の在学生である。担当教員の指示に基づき、TA、SA は学生個々の進捗に合わせた指導を行なうので、現時点では経験、操作スキルの差はある程度解消されているようである。ただし、今年度は、高校での履修が上記のような状況なので、まだ経験・スキル差の問題が顕在化していないとも考えられる。

#### 4. これまでの取組み (授業見学)

高校教員側の受入れ準備、授業中の生徒に与える影響の配慮を考えると、大学教員が高等学校の教室に入って授業を見学すること自体が困難であることを予想した。最初に、前述の講演者、奥村教諭に依頼し、本学への進学者数が多い道内高校 50 校のリストの中で、授業見学を受入れてくれる高校の打診を行なった。この結果、高等学校のメーリングリストを介して 5 校が受け入れを表明し、スケジュール調整の結果、見学を実施できたのが、3 校であった。

高等学校長宛てに以下の文面を含んだ依頼文を送付し、調査の主旨を伝えた。『2005 年度は教科「情報」の教育を受けた高校生が受験生となり、2006 年度には、従来の職業高校で情報処理教育を受けた層に加え、さらに教科「情報」において異なったレベルの知識と経験を持つ入学者を受入れることになる。本学に

において、このような多様な学生達を教育する準備を速やかに行なう必要がある。この理由から、現段階で道内高校における、教科「情報」の授業の実施状況について、出来る限り「実情」を把握することは大きな意義があると考える。形式的な調査ではなく、高等学校に直接出向いて、「現実に行なわれていること」を、授業見学等を通じて調査する。今回は、その「予備段階的な調査」として位置付けている。』

また、現場教員の労力、そして出来る限り実情を見たいという希望から、次のような文面も付け加えた。『私たちは大学の現場で教育を担当する者として、高校の教室に直接足を運び、自分達のみで「実情」を見てみたいと考えています。特別なご準備は必要ありません。ご協力いただける先生の授業中の教室に入れていただければ幸いです。』

2004 年度は 11 月後半から 2 月後半まで、合計で 6 回の見学を実施した。以下はその内容である、A、B、C で高校を区別している。A 高校からは 4 回の見学機会を得た。

	見 学 内 容
A 1	ネットワークを利用する上での「モラルとマナー」についての座学。主に実習室の PC 画面上で授業を展開。著作権や個人情報の問題などを、クイズ形式のスライドを用いて解説。生徒達の反応を想定した上での教材準備。
B 1	ホームページ作成。生徒達が以前に作成した画像を貼り付け、各自でギャラリーを作成する。自己紹介の部分は前回までに作成済み。同じ操作を何度も手際よく繰り返すように授業を工夫。このホームページを高校内で公開し、生徒間でコメントを送りあうなどしてネット上でのコミュニケーションを模擬する予定。
C 1	EXCEL を用いた成績集計。表作成、SUM、AVERAGE などの関数を用いた計算を行なわせる。生徒用 PC の間にモニタがあり、生徒達はそれを見ながら実習。
A 2	パワーポイントでプレゼンテーションを行なうためのグループ単位での内容検討作業。テーマは登下校マナーなど、高校内での話題に限定。この日は、取材方法とスライド構成

	について検討。グループリーダーは課題制作日誌に記入して教員のチェックを受ける。この日誌には、活動日時、記録者氏名、活動内容、感想と反省、次回の手配、活動評価（自己申告）を記入する。
A 3	3～4人が1グループになってプレゼンテーションを行なう。この日は6グループが発表。テーマは、「身だしなみ」、「遅刻問題」、「登下校マナー」、「ペットボトル」である。グループ内で役割分担をし、スクリーンを使って発表する形式。
A 4	プレゼンテーション見学の第2回目。3つのクラスを見学。1クラス目は出来の良かったグループによる再プレゼンテーション。2クラス目はプレゼンテーションが終了したクラスで、反省文を書く。3クラス目は、各スライドを担当教員がスクリーン上に表示しながら評価のコメント。

## 5. 今回の調査で確認できた点

すでに指摘されていると思われる点も含まれるが、今回の調査で確認された点を記しておく。

① 高校で教える内容は、中学校の技術家庭で学んできた内容や家庭環境(PC所有、ネット接続)に依存して決まってくる可能性がある。C校では入学者に(パソコン使用経験、基礎学力等の)幅があるので、最低ラインを揃えるために「情報A」を採用している。A校、B校では、情報リテラシーは今後、中学校の技術家庭で学んでくることを想定してコミュニケーションに重点を置き、「情報C」を採用している。

② まだ教科「情報」が単独で存在している感があり、「情報」で学んだことを2年次、3年次で(他の教科などで)活用できるような状況にはなっていない。(全国での先行的な取組み例については、例えば柴田(2005)、八百幸(2005)を参照。)調査を実施した高校の1つにおいても「情報」が他教科の教諭からの関心が低い状況にあり、担当教員から「今回、大学から授業見学に来たが、校内からは誰も見学に来ない」といった話しも出た。他の教科から見て、チームティーチングで1コマの授業に2人の教員を配置することに対する批

判もあるようだ。

③ 高校の授業では生徒間に格差があっても「足並みを揃える」ようにして授業を進行させている。すでに知識・経験を持つ生徒が、早々と予定の課題をこなし、時間を持って余し、パソコンの前に座っている光景はいずれの高校でも見かけた。パソコンの使用が授業時間内に限定されるという実情も反映していると思われる。

④ 指導要領に従って行なっているという側面もあるのだろうが、大学教員の目からすれば、評価に関して細かな工夫がなされている。例えば、プレゼンテーションを行なわせる場合、成績評価に「自己評価」、「生徒間の相互評価」を取り入れていた。生徒達が作成したプレゼンテーションスライドについて、教員が優れた点、改善を要する点などを指摘していた。

⑤ 教科「情報」を実施して2年目となり、試行錯誤を重ねながら先駆的な取組みを行なった高校を中心として、授業のノウハウが蓄積されつつあるように思われるが、使用する教科書によって、あるいは各高校の担当教員の経験、専門性(興味)によって授業の内容にばらつきが生じていることは否定できない。大学入試科目に教科「情報」を採用する動きも含めて、このばらつきが今後どのように解消されていくのかを見ていく必要がある。

⑥ 高校生によるプレゼンテーションを見学し、取組み方によっては高校1年次の限られた授業時間内でも発展的な内容に取り組むことが出来、指導すればさらなる成長を期待できることが確認できた。また、他の授業では目立たない生徒が力を発揮するような場面もあり、新たな学習空間を作り出せる可能性があると思われる。

## 6. 今後の課題

今回の調査に基づき、以下のような課題が

発生すると予想される。

① 今後、大学でコンピュータリテラシー教育を行なう必要性は減っていくが、地域間、高校間の格差があるので、それを補うとすれば、何らかの形で能力別指導を大学で行なうことが必要になることが予想される。個々の学生の能力を伸ばすという観点からすれば、高校の授業で見られるような「足並みを揃える」やり方は成り立たなくなる。

② 高校でコンピュータリテラシーを習得済みであるという前提に立てば、大学ではより高度な専門教育に移行していく必要があるが、高校の現状をふまえた上で、教科「情報」と大学の専門科目との接点をどのようにするかを検討する必要がある。

③ これまで職業高校出身者が情報科目を履修する際に陥りやすかった、本人は「わかつたつもり、出来るつもり」でいるが、基礎知識が部分的に欠落していたり、問題を掘り下げることが不足しているような場合への対処が、教科「情報」の場合にも発生する。

④ 高校での授業方法を大学でも(ある程度)踏襲するかどうかという問題が発生する。特に学生と教員のインタラクション、成績評価の方法などについて、高大間での接続をどのようにするか検討する必要がある。

## 7. 高大の接続

① 大学側の受入れ態勢を整える上での問題として、1つは高校での「情報」の学習状況のばらつきを把握するために、少なくともここ1～2年は定期的に調査を行なう必要があると考える。その方法として、入学者を対象としたものでは、現時点では、教科「情報」の履修内容に関するアンケート調査、新学期開始時に行なうクラス分けのためのプレースメントテストによるものが考えうる。

② 高校の限られた授業時間の範囲内ではカバーしきれなかった部分に関して、大学の資源を使って補うという方法の可能性。例えば、

夏休み中にサマースクールを実施することなどが具体化しやすいと思われる。また、e-learningを活用して、高校生を継続して大学の授業に参加させる等の方法でもよい。

③ 大学教員が教科「情報」に関わる議論の場に関わる、あるいは前述のシンポジウムの発展形を大学側が提供する可能性。例えば、高校の教育研究会などの組織と連携してシンポジウムを開催することを検討してもよいと考える。その場に大学教員が多く参加することによって、教科「情報」の現状に関して徐々に共通した理解を得ることも期待できるのではないかと。

④ 岡本(2004)では大学の教養課程として、マルチメディア表現などを取り入れていくことの必要性が指摘されており、矢島ほか(2005)では、2年次学生対象の一般教養科目における3次元のCGの教育実践が報告されている。社会情報学部では、例えば皆川(2005)におけるCG教育の取組みを1、2年次の学生を対象として段階的に実施していくことも可能であると思われる。

## 8. おわりに

改めて指摘するまでもないが、この新しい教科「情報」の教育に関わる高大の接続は地道に取り組む必要がある。今回、奥村氏に依頼し、札幌学院大学に卒業生が在籍する50校の高校名を挙げて、教科「情報」担当教員用メーリングリストを介して受け入れ先を打診したが、最初に受入れを表明してくれた高校が5校、最終的には3校である。当初は10校程度を期待していたが、それを大きく下回る学校数である。推測の域を出ないが、考えうる理由としては、①打診時期の問題、②高校側で特別な準備を想定していた、③高校現場での抵抗感、である。②に関しては、受入れ準備が整わないので延期を申し出てきた高校もあるので、「対外的に見せることが出来る授業」を意識している可能性があったと考えら

れる。③については、教育の現場として、授業中の生徒達に与える影響を配慮した可能性が高いとも思える。

見方を変えるならば、このような状況のもとで、今回見学を受入れてくれた3校が特別な例であったとも考えられる。このような試みは高等学校の理解と協力がなければ、実現できない。ここに記して当該学校長をはじめ関係教員各位に改めて謝意を表わしたい。A高校（札幌拓北高等学校：校名公表承諾済）については今年度も継続して授業見学の許可を得ており、次年度に向けて、「情報」関連科目の接続を目的とした高大連携を検討する予定である。その結果については今後、改めて報告していきたい。

なお、「第13回社会と情報に関するシンポジウム」は札幌学院大学社会情報学部の研究事業の一環として、今回の調査は、2004年度、2005年度全学運営費利用事業「北海道内における高校普通教科「情報」の実施状況調査」として実施されている。

#### 参考文献

岡本敏雄(2004)「高校普通教科『情報』と大学『情報教育』との接続性をどう考えるか」『社会情報(札幌学院大学社会情報学部紀要)』Vol.13, No.2: 3-18

生田茂(2004)「新教科『情報』の理想と現実」『社会情報(札幌学院大学社会情報学部紀要)』Vol.13, No.2: 19-38

奥村稔(2004)「学びのインフラとしての『情報』」『社会情報(札幌学院大学社会情報学部紀要)』Vol.13, No.2: 39-62

石川千温(2004)「北海道高等学校教育研究会 第2回情報部会研究会参加報告」『社会情報(札幌学院大学社会情報学部紀要)』Vol.13, No.2: 189-190

皆川雅章「個人差を考慮したCG教育の必要性について」『情報科学(札幌学院大学情報科学研究所紀要)』第24号: 49-54

石川千温, 中村永友, 渡邊慎哉(2004)「文系学生のためのコンピュータ指南書」ムイスリ出版  
布施泉, 野坂政司, 岡部成玄(2005)「教科「情報」は難しい?」高等学校普通教科「情報」実施初年度アンケート調査報告, 日本情報教育開発協議会

森夏節(2005)「変革期における新入生のコンピュータリテラシー調査」2005 PC Conference 論文集: 41-42

柴田直美「教科「情報」の授業——教科の連携と教材の関係を考える——」2005 PC Conference 論文集: 37-40

八百幸大ほか「教科「情報」のプログラムII」2005 PC Conference 論文集: 33-36

矢島ほか(2005)「ツールを用いた3次元CGの教育実践」2005 PC Conference 論文集: 91-94

#### 参考 URL

北海道高等学校教育研究会情報部会

<http://www.choice.hokkaido-c.ed.jp/>

表1 全学共通科目「コンピュータ基礎」 プレースメントテストの内容

問 意	解答 (選択肢)
文字の大きさを表す単位はどれですか？	1. ドット 2. バイカ 3. ポイント 4. スケール
読み取り専用のメディアはどれか？	1. CD-R 2. DVD-RW 3. DVD-RAM 4. CD-ROM
正しいものをすべて選びなさい。	1. アイコンとはコンピュータの操作を選択する時に便利な絵文字のことである。 2. マージンは印刷面の上下だけの余白のことである。 3. ルーラーとはウィンドウをスライドさせるつまみのことである。 4. ハードディスクはフロッピーディスクよりデータの読み書きが早い。 5. ディスプレイの大きさは横の長さで表す。
間違っているものを選びなさい。	1. 均等割付とは指定した範囲に文字を同じ間隔で配置する機能のことである。 2. ぶら下げインデントとは段落の1行目の字下げの幅を調整する機能のことである。 3. 段組とは文字列を複数段に構成する機能のことである。
ワードにない名称はどれか一つを選びなさい。	1. 絶対参照 2. アウトラインモード 3. 禁則処理 4. スタイル
ワードの操作で正しいものを選びなさい。	1. カーソルの後ろの文字を削除するには [Delete] キーを押す。 2. 文字を入力して漢字に変換するには必ず [変換] というキーを押さねばならない。 3. 文字入力中に間違った場合には [Esc] キーを押して「かな」に戻すことができる。 4. 文字入力中に間違った文字を削除するには、間違った文字まで矢印キーで移動して [Back Space] キーで削除することができる。
ワードの操作で正しいものを選択しなさい。	1. 読みが判らない漢字を入力するには IME パッドのソフトキーボードを使う。 2. 読みが判らない漢字を入力するには IME パッドの手書きモードを使う。 3. 読みが判らない漢字を入力するには IME パッドの部首モードを使う。
ワードの操作で正しいものを選択しなさい。	1. ファイルの保存方法には「名前を付けて保存」がある。 2. ファイルの保存方法には「上書き保存」がある。 3. ファイルの保存方法には「WEB ページとして保存」がある。 4. ファイルの保存方法には「更新保存」がある。
ワードの操作で正しいものを選択しなさい。	1. タブマーカーはドラッグで移動できない。 2. タブマーカーは矢印キーで移動できない。 3. タブマーカーは複数の段落に一度に適用できる。 4. タブマーカーの解除は [Delete] キーで行なう。
ワードの操作で正しいものを選びなさい。	1. 印刷する前にレイアウトを見るには、メニュー→「表示」→「印刷プレビュー」で確認する。 2. 印刷プレビューするにはツールバーの「印刷」ボタンをクリックする。 3. 印刷プレビュー画面から印刷をすることはできない。 4. 印刷プレビューでは複数ページを同時に見ることができる。
ワードの操作で正しいものを選びなさい。	1. ヘッダーにはページ番号を入れることはできない。 2. フッターは左右のページで変えることができる。 3. ページ番号の挿入は、メニューの「挿入」→「ページ番号」で入れる。 4. フッターの編集は、メニューの「表示」→「ヘッダー/フッター」で行なう。
ワードで行頭に図や絵を設定することはできる	1. YES 2. NO
あなたは高校時代、コンピュータ操作 (Windows やワープロ) の授業を受けたことがある。	1. YES 2. NO
あなたは大学入学以前から自分自身の (家族と共用でない) パソコンを所有していた。	1. YES 2. NO
コンピュータは初心者に等しい。	1. YES 2. NO
携帯以外のメールアドレスも利用している。	1. YES 2. NO
コンピュータが動かなくなったときの対処方法を知っている。	1. YES 2. NO
ネチケットという言葉を知っている。	1. YES 2. NO
インターネットの掲示板では投稿者の特定は不可能だ。	1. YES 2. NO
できるならば他の人よりコンピュータに精通したい。	1. YES 2. NO



表2 全学共通科目「コンピュータ基礎」講義内容  
表2A コンピュータ基礎A (全学共通科目, 前期2単位)

回	講義内容
1	オリエンテーション, 習熟度確認テスト, Windows 基本操作
2	インターネットブラウザ操作, ファイル操作, 文字入力操作 (課題1)
3	ワープロ基本1 (課題2~6), ワープロ基本レベルについての説明
4, 5, 6	ワープロ基本2, 3, 4 (課題2~6)
7	情報倫理講習, WWW 上での情報倫理試験 (課題7)
8	ワープロ応用1 (課題8~12), ワープロ応用レベルについての説明
9	ワープロ応用2 (課題8~12), 第1回目ポイント (ワープロ基本レベル) 確定試験
10, 11, 12, 13	ワープロ応用3, 4, 5, 6 (課題8~12)
14	予備日

表2B コンピュータ基礎B (全学共通科目, 後期2単位)

回	講義内容
1	後期Bオリエンテーション 習熟度テスト, エクセルの基本説明, エクセル基本 (課題13~17)
2, 3, 4, 5	エクセル基本 (課題13~16)
6	エクセル応用 (課題17~20) エクセル応用レベルについての説明, 第1回目ポイント (エクセル基本レベル) 確定試験
7, 8, 9	エクセル応用 (課題17~20)
10	パワーポイント基本 (課題21~25), パワーポイント基本レベルについての説明, 第2回目ポイント (エクセル応用レベル) 確定試験
11, 12, 13	パワーポイント基本 (課題21~25)
14	予備日

表2C コンピュータ基礎C (全学共通科目, 前期2単位)

回	講義内容
1	ガイダンス, Word を用いた DTP (Desk Top Publishing)
2, 3	DTP — パンフレットを作る
4, 5, 6	DTP, 情報の検索 — ニュースレターを作る
7, 8, 9	Excel のビジネス利用 (ワープロライクに) — 見積書の作成
10, 11	Excel の応用 — ピボットテーブルの利用
12, 13, 14	Excel の応用 — 大量データの集計と報告書作成

表2D コンピュータ基礎D (全学共通科目, 後期2単位)

回	講義内容
1, 2	Word を用いた DTP (Desk Top Publishing) — 差し込み印刷
3, 4, 5	Excel の応用 — 高度な関数の利用
6, 7, 8, 9	ホームページ作成 — ホームページビルダーの利用
10, 11	ホームページ作成 — Html タグの利用
12, 13, 14	画像編集 (Photoshop)